

感覺素材としての原ヒュレー Urhyle

——後期フツサルにおける衝動的志向性の感覺素材として——

佐藤 幸三

前書き

フツサルは「イデーニー」^[1]で、対象を純粹に意識において構成するために現象学的還元という方法を確立し、その感覺素材をヒュレーとした。しかし、その方法は、後にフツサル自身によつて「デカルト的な道」と呼ばれ、短所が指摘されることになつた。すなわち、現象学的還元は超越論的自我の領野を開かしめるもの、あまりにも簡略な道であつて、自我を内容空虚なままで顕わにする、と言うのである。それに対して、「新しい道」は具体的な世界の解明を試みる。

小論「感覺と志向的意識」^[2]においては感覺とヒュレーの違いについて論じた。

そして、フツサルが「イデーニー」で感覺素材としたのはヒュレーであり、それは身体における感覺とは異なるものであることを述べた。もし、「新しい道」の対象とするものが具体的な世界であるとすると、素材の性格、そして、その把握方法は改めて問われ

なければならぬはずである。そこで、ここではその一つの段階として、感覺素材について改めて考察してみたい。

フツサルは、ヒュレーより低位にあるものとして原ヒュレーと呼ばれる感覺素材を想定している。「新しい道」が選択されたとは言つても、それによつてなにも諸々の還元に基づく現象学的方法が放棄されたわけではない。それゆえ、感覺素材もヒュレーから感覺へと引き戻されたわけでもない。原ヒュレーについては、それゆえ、より具体的なものであるということが要請されている。原ヒュレーを含むフツサル現象学での諸母件については、N・リーが「エドムント・フツサルの諸本能の現象学」^[3]で詳細な論述を試みている。今回の小論では、N・リーの論説を吟味しつつ、原ヒュレーの所与としての性格を明らかにし、それが自我にとつて感覺として現実的な所与たりうるのか、その可能性について論じてみたい。フツサルは晩年、ヨーロッパ世界で生じた学問の实证主義的傾向を学問的空洞化を招くものとして批判した。生に対する学問の意義の回復は、内実を伴つたものでなければならぬ。はたして現象学はその

役割を担えるのであろうか。そうした問いを問うためにも、現象学が素材としている感覚素材にまずは焦点を当ててみたいのである。

一、感覚的ヒュレー Empfindungsstyle の性格について

感覚とヒュレーはともに非志向的なものである。だが、それでも、両者がそれぞれ性格を異にするのは、感覚が現実的に身体を刺激するものであるのに対して、ヒュレーは意識野において意識を触発する素材であるということのうちに示されている。感覚所与は、感覚としては「絶対的時間位置の源泉」(Hua, X, 66)である。だが、ヒュレーの次元で「持続する客観の《産出》へと入る《源泉性》」(Hua, X, 68)は、必ずしも厳密な意味で原初的なものではないのではない。フッサールは「感覚所与は、ほんのわずかの時間差であるにせよ、それを生気づける統攝が始まりうる以前に構成されていなければならぬのか」(Hua, X, 110)と自問している。ヒュレーは意識を触発する以前にすでに先構成されている。

N・リーが「感覚は、発生的現象学においてはたんにヒュレーの規定された形式を呈示している」(Pr, S, 82)と述べているように、内的時間意識を領野とする発生的現象学にとって感覚所与となるのはヒュレーである。意識にとつての感覚所与がヒュレーであるかぎり、意識が構成する対象の素材もヒュレーであることは疑いえない。ヒュレーは、感覚的であるということにおいて、素材としてより原初的なものはずである。だが、ヒュレーがあらかじめ先構成されて自我に与えられるとするなら、それと身体的感覚とは差異があるということになり、感覚を真にそのまま映しているとは言えなくなる

るのではないか。ヒュレーの性格を明らかにするために、まず最初にヒュレーの二種態について考察する。

フッサールは「イデーニン」で志向的体験が成立するゆえんの素材を感覚的ヒュレー *sensuelle Hua* と呼ぶのである (vgl. Hua, III, 192)。もし感覚とヒュレーが互いに異なるものであるとするなら、両方の概念を合わせた「感覚的ヒュレー」という語句はいささか矛盾した事態(概念)を表しているように思われる。フッサールは、感覚的ヒュレーを「現実の實在性の本来的に知覚可能な側面の現象学的残余」⁽⁵⁾として性格づけている。もし感覚が感覚の働き *Das Empfinden* によつて捉えられないものであるとするなら、フッサールの感覚ヒュレーについての定義は感覚の本来的な性格を尊重したものと見なすことができる。感覚の意識による救い難さは、フッサールの「このような感覚的諸体験がいつも志向的機能のうちに存続するものなのかどうか、ここでは決定されえない」(Hua, III, 192)という言葉からも理解される。また、「感覚と志向的意識」(64頁参照)でも述べたが、感覚されないものが感覚なのである。だが、フッサールは、他方では、感覚野は「原印象的で内在的な諸事象」⁽⁶⁾「現在」を扱うとしていえることから、あるいは、「意識は、変容されていないものとしては《感覚》であり、また、これと同じことを意味しているが、印象である」(Hua, X, 103f)と述べていることから理解されるように、感覚とヒュレーの源泉である原印象を明確には区別していない。感覚とヒュレーは同じように、たんに感覚内容、もしくはは感覚素材として定立されていて、相互に判明な区別はされていない。それゆえ、フッサールからそれ以上の感覚的ヒュレーの概念を

探り出すことはできないのであるが、N・リーは感覚的ヒュレーを、一、本質的に二次元的な対象であり、三次元的対象性の領野である知覚野の構成のための発生的原則を打ち立てるものとして (Vgl. Pl. 96f.)、二、ヒュレーと、それに向けられたドクサの表象志向の統一として (Vgl. 100.)、三、感覚的ヒュレーの統一として (Vgl. 101d) 定義している。N・リーが述べるところによれば、このうち、二、は感情やキネステーズにかかわるものとして (Vgl. 101d.)、三、は原ヒュレーにかかわるものとしてある (Vgl. 101d.)。本小論では、それらについて、それぞれ後述したうえで、最後に綜合して感覚的ヒュレーがヒュレーであり、なおかつ感覚的でありえるのかという問いを原ヒュレーの問題として論じたい。そこで、まず、一、にまつわる問題として、N・リーが感覚的ヒュレーを相 *Aspekt* として捉えている (Vgl. Pl. 96) ことを取り上げてみた。

N・リーは感覚的ヒュレーを相であるとし、その根拠として、「感覚的ヒュレーにおいて、なんらかの様式で世界的なものが告知される」(Pl. 98) ということと、フッサールが「現象学的心理学」で感覚与件は二次元的に与えられると述べていることを挙げている。しかし、ヒュレーはたんなる現出様式なのであろうか。そうした理解の仕方は、N・リーが感覚的ヒュレーをノエマとして規定している (Pl. 100) ことと無縁ではないように思われる。なぜなら、ノエマも自我に対して相 *Wie* において現出するからである。しかし、そのように規定することはヒュレーの非主観性という性格と矛盾しないだろうか。フッサールは第一次的内容である感覚的諸内容 *Empfindungsinhalte* と志向的体験を区別しており (Vgl. Hua, III,

192.)、また、感性的体験 *sinnliches Erlebnis* に關して、「感性的な知覚についての一般的な言い方では、たんなるヒュレーではなく、志向的体験が感性的体験として特徴づけられている」(Hua, III, 193) と述べ、ヒュレーを相として与えられる志向的体験から区別しているのである。ノエマはノエシスの作用に相關する対象面としてある。また、感覚やヒュレーも作用によって捉えられる素材である。しかし、同じく対象面としてあるということ根拠として感覚的ヒュレーがノエマと同じであると言えるだろうか。そこで、次に、ヒュレーとノエマの性格について比較して論じてみたい。

二、ヒュレーとノエマは互いに異なるということ

体験する志向的作用であるノエシスの意識における相關者をノエマという。それについて、フッサールは「ノエシスの志向性はノエマの志向性を意識の相關者としておのれのうちに担っている」(Hua, III, 237) と述べている。ノエマとして定立された対象が、知覚等によって端的に定立された対象ではないのは、それがノエシスの「知覚、判断、氣に入る等の体験」(Hua, III, 203) に即しているということからも理解できる。「それゆえ、ノエマの相關者は知覚、想像、像的準現在化、想起等にとつて本質的にそれぞれ異なるものになる」(Hua, III, 210)。ノエマが対象をありのまま写すということはなく、それはノエシスの作用の性格に応じて変容しつつその相 *Wie* として現出する。ノエマはもともと括弧入れのうちで成立するので内在的にしか存しえない。つまり、そこに実在の性格はなく、たとえばノエマとしての色は「実的成素部分として知覚体験に

属しているのではない」(Hua, III, 226) と言われる。ノエシスは意味にかかわることも、所与性にかかわることも可能である。ノエマは意識に属しながら、そしてノエマに固有の意味、もしくは所与としての内容を介して、「対象的關係をもつ」(Hua, III, 296)。それゆえ、ノエマを介した対象はいつも「すでに意識の対象である」(Hua, III, 310)。ノエシスとノエマは以上のような関係にあるが、それでは、それらはヒュレーとどのような関係にあるのだろうか。

ノエマが実的に知覚に属さないとされたのに対して、「すべてヒュレー的なものは、実的な成素部分として、具体的な体験のなかに属する」(Hua, III, 227)と言われる。ノエマそのものは実的なものではないが、それは「多様なものとしてあるヒュレー的なもののうちでみずからを《显示してくる》もの、《射映してくる》ものは、ノエマに属する」(ibid., 144)と語られている。だからも理解されるように、実的なヒュレーをうちに帰属させることができる。すなわち、ヒュレーとノエマはもともとそれぞれ別個のものとしてあるが、対象定立的なノエシスが作動するとき、ヒュレーはノエマのなかに現出すると考えられる。「多様なヒュレーはノエマとして統一的に構成される」。ヒュレーはノエマの成立以前から、さらには反省以前前からあり、フッサールによれば、それに関連して、「受動性の能作のなかで最も低い段階にあるヒュレーの受動性の能作は、自我に對していつも先所与的な、そして、さらなる持続において、場合によつては、所与的な対象性の野を形成する」(Hua, XI, 162) もしくはヒュレーの対象は「構成しつゝ生成しつゝ」(Hua, XI, 164) いる。こうした諸体験において、多様なヒュレーの所与は意識野にノエマ

として定立され、「ここにまさに、経験事物についての経験意識と呼んでいるものが、形成されてくる」(Hua, III, 311)。ノエマは意味と命題によつて事物世界に關係する。

以上から理解されるように、意識野における実的な成素であるヒュレーを、非・実的なノエマとして性格づけることはできない。また感覺は身体における成素なので、志向的意識の相関者であるノエマが身体的な感覺を担うことはできない。それゆえ、感覺的ヒュレーも、N・リーの考えるように端的にノエマとして性格づけることはできないのではないか。まして、「感覺野は感覺のノエマ的統一」(Pl., 98)とは言えないのではないか。感覺的ヒュレーとは、実在の対象の知覚されえない側面であつた。こうした観点に立てば、N・リーが、感覺的ヒュレーを Ichlichen なものと Ichfremden なものの統一として規定している (Vgl., Pl., 101) のは、いささかの外しているように思われる。なぜなら、感覺的ヒュレーが Ichlichen と Ichfremden としての性格を持つとは、それがノエシスの対象となつてノエマへのなかへと現れてきたときに初めて言えることであり、それ以前は Ichfremden なものでしかないからである。また、もし、感覺的ヒュレーが N・リーの言うようにノエマであるとするなら (Vgl., Pl., 99)、ノエマ自体にも Ichfremden なものがあるといふことになるのか。もしあるとするなら、それはノエマの核なのか、それとも、ノエマ的複合である「全きノエマ」のうちで当該のノエシスの対象となつていないものなのか、そこまでに至る言及は N・リーにはない。

ところで、そもそも感覺であり、またヒュレーでもあるような素

材がありうるのか。感覚所与とは、そもそも感覚なのか、それともヒュレーなのか。その本質的性格は発生的分析を深めることよって明らかになれるのか。こうした問いを、意識野におけるものとしてのヒュレーから遡って、さらに低位にあるとされる原ヒュレーを論じることよって考えてみたい。

三、原ヒュレーの、先意識的なものとしての性格

受動的志向性において、ヒュレーはおのずから連合 *Assoziation* と呼ばれる構成を行いつつ自我を触発し、その注意を促す。その刺激に対して自我は対向 *Zuwendung* する。ここで改めて確認しておきたいのは、触発と対向の関係において、ヒュレーの素材は「内在的時間意識において与え」(Hua, XI, 105) されるということであり、ヒュレーの経験は、「融合、分離化、隔たりという、それに属する本質条件の下で、印象と過去把持が進捗し、その進捗において生きたヒュレーの現在領域の構造形成が前提されている」(Hua, XI, 185) と言われることから理解されるように、「内的な」経験であるということである。

ヒュレーよりさらに低位の段階で、現実に即したものとして定立される可能性のあるものが原ヒュレー *Urhye* である。原ヒュレーは触発が始まる以前の、たとえば「部屋の寒くあること」(Pl, 116) であり、「それはもはや意識的な刺激という意味での触発の統一を呈示しない」(Pl, 116)。原ヒュレーに関して、フッサールは「遡及的問いにおいて、つまるところ、原構造が原キネステーズ、原感情、原本能を伴う原ヒュレーの変化のなかで生じてくる」(Hua, XV,

385) のと述べている。キネステーズとは身体において生じる感覚のことであるが、ここで原ヒュレーが原キネステーズを伴っていることと記述されていることは着目されてよい。ヒュレーは意識的な次元で、能動的志向性以前の受動的志向性が関与している素材であった。それに対して、原ヒュレーは身体的な次元で、自我外 *Ichlos* の素材と連関している。つまり、原ヒュレーを論じることは身体における刺激を論じることである。

N・リーは、原ヒュレーについて、もはや純粹自我から発せられるノエシスの相関者であるノエマとして特徴づけられるものではない (Vgl. Pl, 117) と述べている。他方で、原ヒュレーを先意識的な *vorbewußt*、無意識的な *unbewußt* ノエマ的統一として特徴づける。原ヒュレーは客観化作用の意味での表象志向のノエマ的連関ではなくて、対象的方向性をまだ表していないという意味で、まだ客観化していない作用のノエマ的連関であると言っているのである (Vgl. Pl, 116)。だから、N・リーによれば、「部屋の冷たさ」も生きた現在の原受動的流れにおけるノエマ的契機としてあることは否定されない (Vgl. Pl, 116)。

ヒュレーは非主観的であり、先自我的な時間プロセス (先自我的な、すなわち、「ヒュレーの時間プロセス」 Hua XXXIII, S. XXXVII) にある。ヒュレーは *Ichfremd* な性格をもち、*Ichfremd* の *Ich* もし原ヒュレーに、たとえばアプリアリな様態であった (Vgl. Pl, 105)、ノエマ的契機という性格があるとするとするなら、それはヒュレーにおける *Ichfremd* と同様に、原ヒュレーにおける *Ichfremd* も結局は自我の意識野の一契機であるということになってしまわ

いか。そして、それは、つまるところは「知覚されない側面の剰余」という感覚についての定義を裏切ることにはならないだろうか。

フッサールは先時間 *Vorzeit* を「その意識流については時間流として経験されず、また経験されえない、その意識流において生きている自我に対して、まだ対象の形式をもたないもの」と定義し、先存在 *Vorsein* を「経験できないもの」、「語れないもの」と定義している。この意識流とは、原初的に流れる現在 *die urtümliche strömende Gegenwart* (Vgl. Pl. 114) であるというのだが、先時間や先存在を定立していることで、フッサールが「生きた現在 *lebendige Gegenwart*」において経験以前のものであることを認めていたことが分かる。原初的な現在の流れは「意識野における流れ」より先立つ流れではないのか。

四、身体における感覚の契機としての原キネターゼと衝動的志向性
「部屋の冷たさ」はまずは身体感覚として感じられるはずである。そこで問われるのは、身体、すなわち感覚野で自我を刺激する感覚である。感覚は身体においては、どのような性格のものとしてあるのだろうか。

原キネターゼは受動的に身体に生じる感覚である。それは意識以前にあるものとして能動的なキネターゼに先立ち、最も原初的な生きた現在の領域で生じていて、その継続において、たんに意識野におけるものではない、身体的、すなわち現実的な近接融合 *Nahverschmelzung* (Vgl. Pl. 103) が生じている。その融合は意識外の出来事であるだけに、身体がいつも居合わせている *Dabeisein* と

いう様態において生起している。居合わせることに於いて、身体は何某かを感じているのである。

身体の次元で近接融合が生じているということは、いくつものことを示唆している。それは、一、近接融合を可能にするものとしての時間が存在するということである。身体に生じる感覚であるキネターゼの感覚の持続は、現実的な事物の時間の持続であり、それは受動的志向性の生じる意識における時間とは異なるはずである。そこにたんに *Ichlichem* の相対としてはない、本来的に *Ichfremdem* な、そして原初的で原受動的な時間領野があるはずである。

「世界は前もって与えられている」(Hua, VI, 145) と言われるところの、無限地平が存在するということである。そして、それと関連して、最後に、近接融合を可能ならしめるような志向性が存在するということである。フッサールは「顕現した、もしくは非顕在的な」(Hua, VI, 133)、「志向性なしでは、対象と世界はわれわれに対してそこにあるということにはならないだろう」(Hua, VI, 133) と言う。志向性は世界が自我にかかわっている限り、なんらかの仕方にかかわっている。無限の地平は、

「また、つねに共に意識されているが、しかし、それでも、その瞬間にはまったく無関係のまま存続している背景(たとえば、知覚野)も、その潜在的な妥当性に於いて共に作動している。すべてこうした類のものはつねに活動していて、直接的、もしくは間接的覚起の様態から、そして、自我への触発という様態から、能動的な統覚へと移行したり、また、作用連関のうちに妥当しながら入り込ん

この志向性は現実世界で最初に起こる最も低位の段階の志向性であるはずであり、それは身体の次元で作動している限りにおいて、感情、本能や衝動など身体的な特性にかかわっている。

「受動性の能作とそのなかで最も低層の段階としてあるヒュレーの受動性の能作は、自我に対してはいつも先所与的であり、そして、場合によってはさらなる持続において所与的な対象の領野を形成する」(Hua, XI, 162)と云われるところの能作の対象的素材となるヒュレーは、身体的な特性と働きに基づいて構成されるのだろうか。感覚的諸契機 *sensuelle Momente* は「衝動」の領域に属している (Hua, Vgl. III, 192)。「すべての個別的自我における本能全体は、その根源的衝動として作用する」。感覚と本能、衝動のかかわりを探究することは、衝動的志向性について探究することであり、それはまた原ヒュレーの生起へと遡及することでもある。原ヒュレーの探究は衝動的志向性の探究に他ならない。

五、結語

「生きた現在のヒュレー的領域は自我の知らないヒュレー的擬似世界として、あるいは単純に先世界 *Vorwelt* として特徴づけられる」とあるように、ヒュレーは本来的に先所与として非志向的な性格においてあり、もとより志向的な作用としてのノエンスーノエマという枠組みのなかに初めから組み入れられているものではない。ただ、ヒュレーが意識野において自我を刺激するものであるかぎりにおいて、ノエマのなかで現出してくる。N・リーは「ヒュレーは対象の意味のより高い統一の構成のための質料」(Pl. 43)であると

言うが、たんなる素材としてのヒュレーが意味として意識されてくるのは、ノエンスーノエマの連関に立ち上がってきたときである。

「ヒュレー的なものは感じる自我 *Ethentes Ich* としての自我を刺激する」(Pl. 165)と云われるが、ヒュレーが行うのは「意識に即した刺激」(Hua, XI, 148)である。それゆえ、ヒュレーは通常の意味での感覚とは異なる。フッサールにとって、感覚的なものは「狭義において、感性とは通常の外的知覚において諸感覚によって媒体されたものの現象学的残余を意味している」(Hua, III, 193)と云われることから類推して考えられるに、感覚されないもの、すなわち残余、もしくは感覚される以前のものである。それゆえ、感覚は本来的に自我にとつて所与たりえない。それに代わって自我にとつて素材となるのがヒュレーである。前述したようにフッサールは意識と感覚を区別していないが、ヒュレーが端的に感覚として性格づけられることには疑問がある。本来的には感覚が感覚素材としては第一義的なものであるはずなのに、受動的志向性の理論においてはヒュレーが受動的な志向性のための基底としての役割を演じる。その不思議な倒逆をN・リーは「感覚は発生の現象学においてはたんにヒュレーの規定的形式において呈示されている」(Pl. 42)と述べている。N・リーが言うところの、相 *Aspekt* として捉えられる感覚的ヒュレーは、ヒュレーに基づいて構成された感覚的素材のことを示している。それゆえ、この次元で捉えられた感覚は、ヒュレーという全相を含む枠組みのなかで捉えられた断片としての感覚にすぎない。受動的志向性は意識野で生じるものであるだけに、その素材としてのヒュレーは感覚との結びつきがなければ、自らを豊かに、

そして具体的にすることはできない。感覚であり、またヒュレーでもある感覚素材の可能性は原ヒュレーにおいて開かれるのではないか。

原ヒュレーは意識ではなく、身体に関わる感覚素材である。それゆえ、原ヒュレーは感覚、感情、本能、関心、衝動といったものと関わっている。原ヒュレーは、原受動的流れにおいて、意識野に、発生的に現れてくるものであり、そして、それもヒュレーである限りにおいて、すなわち、触発するものである限りにおいて、N・リーの言うように「構成的産物 *konstitutes Produkt*」(Pl. 136)として性格づけられる。本能―触発に関して、N・リーは「触発の初めはまったく未規定なわけではない」(Ibid.)と、あるいは、「原ヒュレーの構成の領域ではノエシスとノエマの普遍的連関アプリアリが支配している」(Pl. 105)と述べている。しかし、また原ヒュレーがヒュレーと異なるとされるのは、その自我との疎遠 *Ichfremd* 性にある。原ヒュレーがもし全き規定されているものであるとするなら、我々はそのようにして（未知の）感覚の対象を把握することができるとは別、構成的産物として性格づけるのは別に、N・リーは原ヒュレーの概念を客観的作用が働いている段階では、ノエマとしては特徴づけられないものとしても性格づけている (vgl. Pl. 117)。この相矛盾する性格は、原ヒュレーの本質的性格を構成しているように思われる。フッサールは、たとえば身体にかかわる原本能は「本能的なノエシス―ノエマ的傾向」をもつと言う。「客観化の根源的本能」と性格づけられることから理解せられるように、本能が本来的に客観への志向を持つことは否定できない。本能、す

なわち、身体が居合わせつつ感じているものが、そのままノエマであるということの意味していないはずであるにしても、それは自我意識になんらかの影響を与えずにおくものでもない。原ヒュレーは身体的次元にあるものとして、現実的なものでなければならぬ。しかし、それもまた、ヒュレーとしての性格をあわせ持つ限りにおいて、意識野におけるヒュレーと関わっていると考えられる。

「原ヒュレーは原キネステとともにある」。そこに、いわば、「ヒュレーの統一」的を欠いた（*行爲*）⁽²⁾があると言われるように、原ヒュレーは現実世界での身体における盲目的な近接連合の繰り返しによって生じる。その次元で某かの刺激が身体に対して働いているとするなら、それに感じて志向性も作動しているはずである。意識野において扱われる素材がヒュレーであり、そこで生じている志向性が受動的志向性と能動的志向性の循環であるとするなら、それより低層の身体において働いている志向性は衝動的志向性である。衝動的志向性に自我（の意識）は関与していない。その段階での連合の現象にヒュレーと原ヒュレーは関わっていると考えられる。

N・リーがフッサールの規定として述べるところによれば、知覚の進行に関与し、ある知覚志向性から常に新しい知覚志向性への無際限の移行を可能ならしめるのが衝動的志向性である (vgl. Pl. 98)。衝動的志向性が身体に関わる志向性であり、また、その素材が原ヒュレーであるとするなら、原ヒュレーは現実的な素材であると言える。そうした感覚所与を素材とすることによって、現象学的構成はより内容豊かなものになるのではないか。では、現実的な原ヒュ

レーは、意識を領野としている自我にはどのように把握されるのか。無際限の移行を可能ならしめる衝動的志向性と自我の関係がさらに問われなければならない。

註

- (1) 「イデーニー」 Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Ⅱ Husserliana Gesamthe Werke, Bd.III に所収。以下、同文献からの引用については Hua, ヲ略し、巻数と頁数のみ表記する。
- (2) 「哲学・思想論叢」第20号(二〇〇二年一月) 参照
- (3) 原本は NAM-IN LEE, Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte, KUWER ACADEMIC PUBLISHERS, Netherlands, 1993. 以下、この著については Pl. ヲ略して表記する。
- (4) H・ホルは、ヒュレーが「触発しうるためには先客観的な統一のなかですでに先構成されていなければならず……」(Hubert Hohl, Lebenswelt und Geschichte, Verlag Karl Alber, München, 1962, S.53) ヲ述べている。
- (5) sensuelle 感覚を立松弘孝氏は感性的ヒュレーと訳している。「内的時間意識の現象学」(みすず書房、東京一九六七年)二二〇頁参照。フッサールは感性的知覚、感性的直観一般に関して(傍点筆者)、それは「たんなるヒュレーの体験ではなしに、志向的な体験が、感性的体験として特徴づけられている」(Hua, III, 193) と述べている。本来的にヒュレーは形式的な志向的モデルフェーに对立するものであり、また非志向的であるというこ

とを鑑みても、それは感性的ヒュレーと訳するのが適當であると思われる。

- (6) フッサール草稿 C6, 5, 1930, Pl.98 からの再引用
- (7) フッサール草稿 C6, 3, 1930, Pl.97 からの再引用
- (8) [K164]「感覚所与の移り変わりにおいて不変の視覚的な領野の形式は、容易に見て取れるように、二次元的である。他方、知覚客体の空間は三次元的である」。
- (9) 渡辺二郎訳、フッサール「イデーニー・Ⅱ」みすず書房、東京、一九八、四〇八頁参照
- (10) 前節の感性的ヒュレーの説明、また注5を参照のこと
- (11) フッサールによれば、生きた現在においては感覚素材がたえず自らを超えて自我を触発している。その触発的覚起は連合と呼ばれる法則性に基づいている。連合とはヒュレーの対象性の構成の諸原理で、共在性や継続性に起因して生じる。具体的には複数のヒュレーの対照や内在的融合が挙げられる(vgl. Hua, XI, §33, S.157f.)。
- (12) フッサール草稿 C13L, 8-9, 1934, Pl. 114 からの再引用
- (13) Ibid.
- (14) フッサール草稿 AVI, 26, 29, 1921-1931, Pl. 121 からの再引用
- (15) 「直接的に、自我と、その自我の外 Ichfremdes とは、それぞれの内容に際して内容的な連関の下にあり、またそのまっただき連関に際して、その自我は感じる Ichendes 自我である」(C16V, 18, 1931, Pl. 124 からの再引用)

- (16) フッサール草稿 EIH9, 18, 1931-1933, Pl. 226 からの再引用
- (17) フッサール草稿 C16V15, 1931, Pl. 60 からの再引用
- (18) 「最も根源的で、あらゆる自我関与から無関係であり、それに先行する受動性において」(AVIII3, S.65, 1921-1930, H・ホール、前掲書、S.53 からの再引用)。構成される原ヒュレーの性格について、H・ホールは「触発と志向の継続的相関というフッサールのテーゼが妥当性を維持するなら、自我に疎遠な Ichfremd の原ヒュレー的なものも、やはりすでに自我を触発したものでなければならず、そのことによって、原ヒュレーは何かについて意識たりうるのである。それについては、しかし、この原ヒュレー的なものが触発するものとして触発する能力をもつためには、それはまた再びすでに与えられているのでなければならず、…」(前掲書、S.54) と述べている。
- (19) フッサール草稿 EIH9, 5, 1931-1933, Pl. 108 からの再引用
- (20) フッサール草稿 C13I, 14, 1934, Pl. Pl. 108 からの再引用
- (21) フッサール草稿 C11V, 10, 1931, Pl. 118 からの再引用
- (22) *Ibid.*

(さとう・こうぞう 筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)